

かかしのまちの ミニ・マガジン

月刊 Monthly Local Magazine : Kaminoyama

# かみのやま

25年間の感謝をこめて…終刊号 2026年4月

# 300号



ごあいさつ「25年間の感謝をこめて」  
発行人&編集人

特別寄稿

「月刊かみのやま」300号に寄せて  
市長・山本幸靖

寄稿

出羽ヶ嶽文次郎の等身像について  
荒井広美

「宮川」という名前  
奥山浩一

「上山のおまつり、あれこれ」  
塩野恵美子

パリの音楽修行から故郷・上山音楽祭へ  
永田美穂

詩・夢(一)  
木村迪夫

思い出すままに  
浦河克

村尾旅館さんの思い出  
太田垣徹

随想 住めば都  
我妻芳徳

かわいかった私(戦争を知らない)  
吉川はる子

追憶 一九七九～八〇  
菅沼光昭

寄稿

「祖母」

長橋康夫

上山小学校校庭にヘリコプター  
大場美紀

レギュラー

「月刊かみのやま」よ。ありがとう。  
長南伸治

わが町再見「藤井松平」⑧ 松平信宝(1) 丸野清耕  
鎌上宏

連載 エッセイ 描いていく、生きていく  
朝日 進

何でも短歌にしてみる  
新寺 登

連載 随筆 ③ 湯の街の春に  
橘 千枝

わが古里 上山を想う=少年時代=  
櫻井和敏

観光ボランティアガイドのとおきのお話 ④  
大貫和春

ぶらぶらスケッチ日記 ⑬  
竹内敏夫

随想 新たな火を灯そう  
佐藤 藤三郎

「月刊かみのやま」折々を飾った表紙たち  
編集部



# 4月

## 観光案内所で レンタサイクル実施中!

桜や菜の花畑など、春の上山を自転車で巡ってみませんか?

[3時間レンタル(税込)]

- ・電動アシスト自転車 1,000円/1台
- ・電動クロスバイク 1,400円/1台

※一日レンタルもあります



### (一社) 上山市観光物産協会

## 023(672)0839

<http://kaminoyama-spa.com>

♥愛車に Make-upを……

## 钣金・塗装・車検

〜承ります〜

東北運輸局長認証工場

創業 47年 **E** 有限会社 **遠藤ボデー**

〒999-3122 上山市仙石1121-1  
TEL 023-672-7185 FAX 023-672-7167

## メモリアルホーム鶴脛

各宗・総合葬祭

## (株) マルシン葬祭社

寝台車(霊柩)・ワゴン・マイクロバス

上山市久保手4005の10

023-672-4242

023-672-4470

E-mail e-taishin@if-n.ne.jp

内科・循環器内科・腎臓内科・皮膚科・人工透析内科

医療法人 長清会

## N 長岡医院

院長 櫻井清陽 理事長 長岡由女  
医師 長岡美里 医師 長岡迪生

内科 診療時間/ 9:00~13:00 14:30~17:30  
皮膚科 診療時間/ 14:30~17:30 (火曜日・水曜日・金曜日)

休診日/ 日曜日・祝日・木曜日

上山市沢丁9番13号 TEL.672-0308

泌尿器科・皮膚科

## 山口クリニック

院長 山口寿功

診療時間: 平日 9:00-12:30 14:30-18:00  
土曜 9:00-12:30

休診日: 日曜・祝日・水曜・土曜午後

上山市四ッ谷 1-6-35 TEL677-0050

## 原田眼科医院

| 外来受付時間      | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 | 日 | 祝 |
|-------------|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 9:00~12:00  | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |
| 14:00~17:30 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |

土曜 12時まで / 休診日: 木曜・日曜・祝日

上山市十日町 9-2

023-672-0008

## 永田歯科医院

Nagata Dental Clinic

診療時間 AM 9:00 ~ PM 1:00  
PM 2:00 ~ PM 6:00

休診日 日曜・祝日・木曜

上山市元城内 3-62

672-0215

### ごあいさつ

楽しい時間はあっという間に過ぎ、苦しみだけが長く感じられるとよく言われます。難しいことは分かりませんが、東京大学総合文化研究科教授 四本裕子さんの説に拠りますと、楽しい時は「心の時計を早送りする神経伝達物質(ドーパミン)が出るから」なのだそうです。

では「月刊かみのやま」が刻んだ二十五年間という時間は短かったのかはたまた長かったのか? 私たちの答えはやはり内緒にしておきます。いずれにせよ、執筆者、スポンサー各位、それに毎月手にとってページをめくって下さる読者のご支援がなければ、世によくある「3号雑誌」で終わっていたことは間違いありません。

ほんとうにありがとうございました。感謝の気持でいっぱいです。この場を借りてお礼申し上げます。

月刊かみのやま

発行人: 阿部

編集人: 岩井

檀 哲

# 「月刊かみのやま」300号発刊に寄せて

上市市長 山本幸靖



「月刊かみのやま」が、記念すべき通算300号の節目を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。

創刊から25年、四半世紀という長きにわたり、このまちの歴史や人々の営み、豊かな自然、そして世代を超えて紡がれてきた文化や表現、日々移りゆくまちの様子を、丹念に誌面へと刻み続けてこられた関係者の皆様のご尽力に、改めて深い敬意と感謝の気持ちをお伝えいたします。

また、発刊にあたっては、多くの市内事業所の方々がスポンサーとして支え、さらに医院や公共

施設など、まちの至る所で市民の皆様の手届けられてきました。この「まち全体で育てられてきた地域の宝」とも言うべき月刊誌は、上市市の誇るべき財産であり、広く市民に愛され続けてきたことの証でもあります。

私自身、愛知県で生まれ育ち、令和2年7月に上市市へ副市長として着任したのが、上山とのご縁のはじまりでした。以来、数多くの市民の温かな心、地域の方々の想い、そして蔵王から広がる四季の自然、美しい果樹園で育つさくらんぼやラ・フランス、風情ある温泉地や伝統文化に触れ、日々上山の新たな魅力に出会ってまいりました。特に上山藩を治めた藤井松平家が、私の故郷である愛知県(当時の三河藤井)の出身であることを知ったときは、まさに運命的なつながりのようなものを深く感じました。

私は市長として、蔵王連峰の雄大な自然や上山城の歴史、斎藤茂吉の歌、美味しい果物やワイン、高品質な農産物など多くの地域資源や魅力を県内外へ発信しています。こうした多彩な魅力が集まる地域は、全国的にもまれであり、その価値は市民一人ひとりの日常の中に息づき、積み重ねられた努力と誇りによって守り受け継がれてきました。

「月刊かみのやま」は、そうした上市市の「宝物」を再発見し、掘りおこし、記録し、次世代へと手渡してこられた存在です。各界各層の多彩な執筆者が、エッセイや市民ならではの視点、多様なテーマでユーモアや独自のエピソードを綴り、市民の表現や思いを温かく誌面に刻んでくださいました。その1ページ1ページを読むたびに、まだ知らない上山の一面を発見し、郷土愛が一層深まる、そんな「宝探し」のような喜びがありました。

現在、本市では「つながりつなげるいろどりのまち かみのやま」を将来都市像に掲げ、幅広い世代が力を合わせ、地域の多様な魅力を引き出

し、支え合うまちづくりを推進しております。「月刊かみのやま」は、まさにその理念を体現し、日々の暮らしのなかにある「文化」や「遊び心」を取り上げ、市民と市民の絆を結び、多世代が自分ごととしてまちに関わり合い、新たな地域の可能性を生み出すきっかけをつくり続けてこられました。その役割と功績は非常に大きなものであり、これまでの歩みに心からの敬意を表します。

300号分に蓄積された多様な表現や市民の想いは、上市市の歴史であり、文化の宝庫であり、そして市民一人ひとりのかけがえのない誇りです。この冊子が育んできた「文化のつながり」を、これからも暮らしや、世代を超えて続く新しい挑戦のなかで、しっかりとつなげていく必要があると感じております。

最後に、編集発行を担われたスタッフの皆さん、この四半世紀にわたり誌面を彩ってくださった執筆者の皆さま、支えてくださった事業所や市民の皆さま、そして温かく応援し続けてくださった全ての読者の皆さまに、心より感謝申し上げます。お祝いの言葉といたします。

# 出羽ヶ嶽文次郎の等身像について

荒井広美  
(南部公民館勤務)

上山市永野字堀切出身の郷土力士、出羽ヶ嶽文次郎は上山市民のよく知るところです。

しかし、等身大の彫刻が三体あり、それぞれ上山城（公益財団法人上山城郷土資料館）と、体育文化センター（上山市三友エンジニア体育文化センター）、それに、山形美術館の三ヶ所にあり、設置場所が移されたりしていたことは意外に知られていないかと思われます。

ただし、すでに鈴木禎氏が、この『月刊かみのやま』第25号（二〇〇三年五月）に、「上山学あちらこちら」のシリーズで「齋藤茂吉没後五十周年記念エッセイ⑩『出羽ヶ嶽の歳月』」として、三体の等身像のことを紹介されています。

それで、二番煎じになるわけですが、私がこの事を知るに至るまでの経緯も含めて、述べてみたいと思います。

平成二十三年、秋頃、高瀬陽吉氏（前上山市文化財専門員）が、『やまがた散歩』（やまがた散歩社発行）第九十一号昭和五十五年（一九八〇）五月一日発行を所収されていて「柏戸に勝った話」をもとに、前述出羽ヶ嶽像の調査を始めてお

られました。その話と言うのは、

「柏戸と伊勢ノ海親方が、山形市に立ち寄ったことがありました。母校の一小の相撲場で、柏戸が山形市内の子供と相撲をとる、という催しがあったのです。一時代のほくは西の横綱だったことや、三中では柔道部に属していたこと等の理由で、ほくもその子供達の一人に選ばれました。・中略・ある時、柏戸とほくが相撲をとっている写真のパネルが、第一小学校の校長室に飾ってある、ということを風の便りで聞きました。大きな出羽ヶ嶽の彫刻がのっそりといつも立っていた校長室。そんな校長室に、柏戸とほくの写真なんて……。以下略……。」（寄稿者 岡田益氏）

なんと、第一小学校の校長室に、出羽ヶ嶽の彫刻が立っていたという驚きの話でした。

当時私は、高瀬氏が携わっておられた業務に従事していたことや、偶然にも母校が寄稿者と同じだったという縁もあって、設置由来調査を依頼されました。

調べていくと、その出羽ヶ嶽等身像と思われた彫刻は、実は新海竹蔵氏作の「日向に立つ土工」だったということがわ

かりました。これは、大正六年、第十一回文展で入選された作品で、そのオリジナルの石膏像は、その後、アズ七日町にある中央公民館の図書館の前に設置された（平成二年当時）ということでしたが、現在は、山形美術館に置かれています。そして、さらにそのブロンズ像が、第一小学校の昇降口に設置されています。

さて、本題の出羽ヶ嶽文次郎像の所在を探っていきたいと思います。

## 1 体育文化センターの像（市役所）

体育文化センター正面から入ったエントランスホールを少し進んだところの左側に出羽ヶ嶽文次郎等身像が立っています。

この像は、上山ロータリークラブ創立二十周年記念事業で建像され、昭和五十二年（一九七七）九月三十日に贈呈式を行っており、上山市ではその記念事業協賛としてへ関脇山形出羽ヶ嶽文治郎関の横顔と略年譜と題した冊子を発行。そこには、故鈴木啓蔵元上山市長による出羽ヶ嶽文治郎の人物像や、エピソードなどがつづられています。そして建像するにあたった経緯が、上山ロータリークラブ二十周年記念事業実行委員、渋谷眞氏より寄せられています。

「建像によせて」

「上山ロータリークラブの創立二十周年を卜して、後世に

残る有意義な記念事業を、いろいろと考えた一つに、郷土の出身力士で歌聖茂吉縁者の斎藤家の養子となり、東洋の三巨人の一人といわれた巨軀の持主でありながら学才もあり努力の人であった出羽ヶ嶽文治郎関像を建てることになった。これは広く上山にその足跡を留め体育振興のシンボルとして次代をなう青少年の若人たちに知・徳・体三心技一体の修練の指標となり励みとなることであろうし、また観光開発にご利用願ひ、明るい地域社会づくりにお役に立てたいという夢を私達ロータリアンは建像に託したのである。

この建像は、郷土が生んだ彫刻界の巨匠新海竹蔵先生が一九三三年製作の等身大木彫像を関係者各位のご理解とご好意により、新進の彫刻家阿部誠氏の手により模刻石膏像にした。

このたび上山市の協賛によりブロンズ仕上げにして建像出来上山の地に永遠に記念されるものと信じ、私達は奉仕の喜びを味わいながら今後も地域社会のため頑張つてゆきたい所存である。」（全文抜粋）

この様なことで、この等身像には二人の彫刻家関わっていたことがわかりました。先に述べた新海竹蔵氏、そして阿部誠氏。

彫刻家 新海竹蔵

明治三十年、山形市の仏師の家に長男として生まれ、同年

十月上京、伯父の竹太郎氏のもとで彫塑を修業。大正六年、第十一回文展に【日向に立つ土工】を出品入選。昭和八年、木彫による【出羽ヶ嶽等身像】を発表。円熟期に入った戦後の製作活動は多くの識者の間で評価が高まり、わが伝統素材である乾漆の手法を工夫するなど、賢確実な作風の多くの佳作を生んだ。

### 彫刻家 阿部 誠

昭和七年、山形県長井市に生まれる。国画会にて会友（無鑑査）、会員（審査員）に推挙される。

昭和五十一年、彫刻日動展に招待出品。以後、毎年招待出品。ブロンズ、木刻を得意とする彫刻家である。

昭和二十五年九月～十月、市制施行記念行事として、「出羽ヶ嶽関の写真展」が催され、同時に等身模刻像が、市役所「市民ホール」に展示されました。

以前 市役所一階ロビーにあった石膏像

その後移されて、体育文化センターにある像



その後、この等身像は上山市役所北側通用口付近のロビーに置かれました。そして、やがてこの等身像は、市役所から体育文化センターに移されました。まさに、体育振興のシンボルとされることになったのだと思います。

### 2 上山城の像（齋藤茂吉記念館）

上山の歴史、自然、民族等の貴重な資料を収集・研究・展示している郷土博物館。市民のシンボルとしてそびえる上山城。その三階の一角に、出羽ヶ嶽文次郎の等身像が遺品や写真、手形と並んで展示してあります。

築城十周年記念・上山城のあゆみ（平成4年、上山城管理公社発行）によると、「この像は、昭和六十三年（一九八八）、齋藤茂吉記念館の改修・増築工事が始まり、工事期間中四月より搬入、同館の資料を上山城で保管することになった。それに関連して、十一月一九日、茂吉記念館から等身像が上山城へ移された。その後、同記念館の展示構想の都合から現在に至るまでこの像



は上山城第三展示室を飾っている」とあります。作者は、阿部誠氏。阿部氏は、石膏像とブロンズ像の二体の

像を手がけていたわけです。そのうちのブロンズ像が、齋藤茂吉記念館から上山城に移されてあるわけです。

一説によると、新海竹蔵は原型からのコピーをとられるのを拒んだといわれていることから、阿部氏の作品は、原型どおりに彫りあげていった模刻像であるといえます。

### 3 山形美術館の像

平成二十四年春、私は高瀬陽吉氏と共に山形美術館を訪れました。美術館にある出羽ヶ嶽文次郎像は、新海竹蔵氏による木彫で、収蔵庫の中にあつて常設はされていません。収蔵されている文次郎等身像に会わせていただきました。



出羽ヶ嶽関から、「オウ、上山の人よく来たな！」と言われたような気がしました。

### 4 さらに、もう一体

はたして「もう一体」といえるかどうか？

旧宮生小学校の「郷土資料室」に、ベニヤ板製の出羽ヶ嶽等身像が立っていたそうです。生涯学習課からの情報です。宮生小学校は閉校となりましたが、階段を上った木造の校舎の部分が解体されることになりました。そこに「郷土資料室」があつて、昔の農具や生活調度品などたくさん貴重な歴史的資料が展示されてありました。

そのベニヤ板像は、確かに等身大ということとは間違いなく、そのそばには同じベニヤ板製の手形もありました。解体前に運び出す考えでしたが、諸道具・資料が置かれていて狭い上に等身の大きさがあり扉から出すのが困難で後日に



と思っっているうちに、解体は進んでしまったそうです。残念でした。いったいどなたが作られたものだったのでしょうか。

# 「宮川」という名前

奥山浩一（上山市立宮川中学校 第二〇代校長）

昭和六十三年度、新規採用教員として赴任した宮川中学校九年間、その後令和五年度に二十六年ぶりに校長として三年間勤め上げ、今春役職定年となった私。

改めてどうして『宮川』と言うのだろうか。現在、宮川地域を流れる『須川』という名前もいつからそう呼ばれていたのだろうかとなった。

地域の重鎮に聞いても、『いつ』も『なぜ』もわからないまま、最終年度を迎えた。なんとか突き止めたいとの一心で、文献を読み漁り、村山総合支庁や上山市土地改良区、上山市役所建設課の方につながっているうちに、いろいろなことがわかった。

## ☆現在呼ばれている三つの『宮川』

- 宮川中学校（上山市牧野）昭和三十三年開校
- 宮川橋（上山市榑下）昭和三十七年完成
- 宮川水管橋（上山市東町・北町）昭和三十四年完成

- ☆資料から見つかった事実
- 明治三十四年、昭和四年の地図には『宮川』という記述。
- 明治二十八年「河川法」。その後の昭和三十九年「新河川法」により、「宮川」は「須川」に改称。
- 蔵王川合流点より上流は、かつて宮川とよばれた。
- 明治二十三年、東川を宮川と改称（上山市西部土地改良区史）
- ☆その他、手に入れた史実
- 「○○宮」と名の付く神社（宮）の近くを流れる川を「宮川」と称した地域がある。例：「豊宮川」三重県伊勢神宮外宮
- この地区内に「○○宮」と称する旧跡として「東郷土史」に記録として残っているものとしては、
- ☆大神宮（菖蒲）：1832年 ☆水神宮（牧野）：1866年

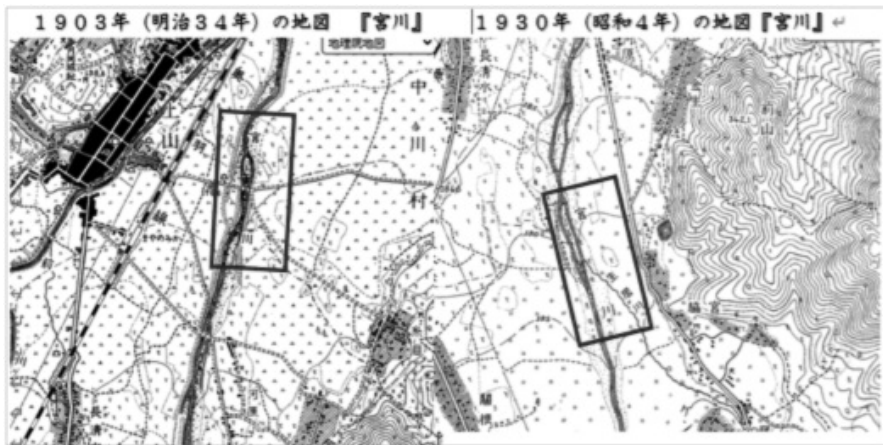
- ☆大神宮（牧野・須田板）：1879年
- ☆大神宮（大門）：1890年 ☆水神宮（小笹）：1917年
- 正八幡神社（宮脇）：1903年（寛治七年）起源。
- 『上山見聞随筆』：明治三十五年『蔵王山の仙人沢より発す東川（今は宮川ともいふ）・・・』
- 『上山市史』：須川水系の上流は萱平川・菖蒲川・柏木川・金山川・宮川を相合し、古くは東川と呼ばれていた。
- 『本庄郷土史』：藤沢集落の周辺には十二の前・天の宮・宮地などの地名が残っており、この周辺を宮地と称するように・・・

## ☆三つから考えた三つの仮説

- (その一)  
川の周辺の藤沢集落がかつて「宮地」と呼ばれた説。
- (その二)  
正八幡神社の近くの村という意味で「宮脇」という地を流れていた説。
- (その三)  
大門地区から須田板・牧野にあった宮と宮脇の近くを流れていた説。

## 《寄稿》

以上、三つの仮説まではこぎつけたが、それ以上迫ることはできなかった。



『月刊かみのやま』300号（終刊）を祝し惜しみて  
「上山のおまつり、あれこれ」

塩野恵美子（沢丁）

へ月夢に白河ドコイサノサ、板谷もこえてヤレコノセ  
ここは最上の上の山上の山  
ヨイシヨヨイシヨコリヤ  
ヨイシヨヨイシヨナ  
へ戸蔵王おろしに白雪きえて  
春は月岡花ふぶき花ふぶき  
へ肌は雪肌村山育ち  
とろりかりねに三味の音三味の音

この曲を聞くと石井順三さん、中山晋平さん作詞作曲  
「上山温泉小唄」、三楽湯郷鶴脛温泉ゆらいの湯の町だなあ  
と思います。子供のころから耳についている歌です。

さて、湯の町かみのやまですが、上ノ山には四季折々にお  
祭りがありました。

へカツカッカーと二月十一日建国記念日、纏まとの励ましに  
藁わらの着物ケイを着て片足で街の中を跳ね踊りながら練り歩く、  
この加勢鳥に周りの人がバケツで冷水をかける火伏と商売  
繁盛の祭りです。市内の人はもとより観光客は県外ばかり  
でなく、今では外国の人も加勢鳥になって参加し、沢山の人  
でにぎわう威勢のいい真冬のお祭りです。

四月になると、月岡のお城のまつりで、三日間お城の前に  
ステージを作って、歌や踊りや詩吟など大勢の人が集り、駕  
籠かごかごかき駅伝、案山子かかしゆらいの下駄飛ばし大会、サクラ  
ンボ種飛ばし大会がありました。五月には月岡神社境内の  
上山麒麟きりんを鑑賞しながら上山を楽しみました。

夏は、待つてました！花笠踊りで二日間盛り上がり、大勢  
の観光客も参加して楽しい踊りが練り広げられました。お  
城前ではビヤードンや盆踊りで盛り上がりました。神  
社境内では野外スクリーンに映画興行がありました。

さあ、いよいよ上山秋まつりです。

へおどろいたおどろいたのははじまりで、上山の踊り山車だし、  
私も二十五年間赤堀つる叟会の踊り山車屋台で踊りまし  
た。男衆が引張る山車屋台の上で踊るのは何とも言われな  
い気持ちのよい楽しい一日でした。山形舞妓が参加するま  
では山車一台だったので朝七時から夜九時まで一日中踊り  
通しでした。日本髪を結かむって、簪かんざしつけて、白塗り化粧をして、  
着物を着ると誰だかわからないくらい化けて、皆若くなっ



山車で舞う筆者（2016年9月18日撮影）

て楽しい祭りでした。あっちこちから掛け声がかかり、村  
尾旅館、古窯さんの坂を上る時は曳き手の方も踊り子の私  
たちも大変でした。山車の終わりは、へ上山の若い衆はよい  
若い衆、へうさぎうさぎ何見てはねる、の歌詞で南町の終点  
に帰ります。

秋になりました。上山かかしまつり。上山農業高校発祥の  
かかし祭りは、日本一の案山子祭り。三波春夫のかかし音頭  
が街に響きわたり、秋の実りを祝います。かかし祭りの市民  
作製案山子は全国に引き取られていきました。秋祭りの踊  
りには「いろは組」「上山若連」「赤堀つる叟社中」の屋台、  
ちよつとこの前の様に思います。

上山で生まれて上山で育って八十三年間、どこへも行っ  
たこともなく、四十才で日本舞踊を習い、五年前で終わしま  
した。

上山のお祭りには全部出させていただき本当にありがた  
く思っております。

フリーマガジン「月刊かみのやま」は300号で終刊にな  
るとのこと、本当にご苦労様でした。何らかの形で引き継が  
れることを願いつつ、今つづいている上山のお祭りがま  
ます発展することを願い、感謝の言葉といたします。

# パリの音楽修行から故郷・上山音楽祭へ

永田美穂（上山出身）

月刊かみのやまに掲載するエッセイの依頼をいただいたのは、今から20年前前パリへの音楽留学が始まって間もない頃でした。それまで定期的に寄稿する経験がなかった私は、驚きと同時に「自分にそんなことできるのだろうか？」と戸惑いを感じていました。声をかけてくださった月刊かみのやま編集長の岩井さんは、そんな気持ちを察してくださったのか、「時間がある時でいいから。そして記事のためにネタ探しの生活をするのではないように。あくまでも勉強最優先で。」と温かい言葉を添えてくださいました。留学生活が始まったその時期は、ピアノの練習音への苦情による隣人トラブル、練習可能な住まいが見つからな



いなど、音楽を学ぶために留学したはずなのに、それ以前に立ちはだかる問題続きのスタートでした。そんな状況の中、イタリアの学校とのダブルスクールも始まり、『パリへの留学記』を書く上で、ネタを探すどころか話題に事欠かない日々でした。一見華やかな

印象を持たれがちなパリでの留学生活は、素晴らしいレッスンや多国籍のクラスメイトとの交流といったかけがえないものがあると同時に、正直なところ苦労やもがきの毎日で落ち込むことの連続でした。そんな中でこの『留学記』は、文字にすることで自分の気持ちや考えを整理し冷静に受け止めることができたこと、何より自分がいる場所と遠く離れた故郷・上山を繋いでくれていた大切な存在となっていました。留学先のレッスンでは、自分が学んでいる曲へのイメージや考えを言葉で表現することも常に求められていましたので、このエッセイを定期的に書く機会は、自分にとって良い訓練にもなっていたと思いま

## 《寄稿》

す。いつだったかパリで出会った方から「月刊かみのやま読みました」と声をかけて頂いたこともあり、世間の狭さに驚いたこともありました。留学時代に知り合ったチェリストの主人・中木健二と共に、帰国後上山音楽祭「ル・シャトーかみのやま」を開催して今年で約10年になります。「10日間、大好きな上山のまちを音楽でいっぱいにする！」というコンセプトで始まったこの音楽祭。全国各地から若手チェリストはもちろん、音楽祭ファンの方々も多く上山を訪れてくださるようになり、中には「上山は私にとって第二の故郷です」と言って毎年来てくださる方もいらっしゃいます。この音楽祭に参加したチェリスト達は、その後留



学したり、コンクールで結果を残したり、プロとして活躍したりと、それぞれの道で羽ばたいています。山形交響楽団のエキストラの仕事で山形に戻ってくる方もいます。音楽祭開催時には、上山市の皆様から多大なる応援とご協力をいただいて、地元の方々の

温かさも参加者たちの大きな励みとなっています。

こうした上山音楽祭の活動がきっかけとなり、このたび「上市アンバサダー」を務めさせていただくことになりました。魅力あふれる故郷・上山を、これからもできる限り多くの皆様にお伝えしていけたらと思っております。今年第9回目となる上山音楽祭「ル・シャトーかみのやま2026」は、3月20日〜29日で開催予定です。メイン会場となる上山城、各まちなかコンサート、そして29日（日）に三友エンジニア体育文化センター・エコーホールで行われますラストコンサートには是非足をお運びください。

最後に創刊300号の歴史あるこの【月刊かみのやま】に長きに渡り掲載させていただきましたこと、心より感謝を申し上げます。そしてこれまで手に取り、読んでくださった皆様、本当にありがとうございます。

# 夢 (一)

木村迪夫

わたしは

めいじ四十四年四月十五日

まえの中川むら足ノ口ぶらくのうかに生されてもらい

一年二年とあたたかいお母さんの手でかわいがられ七つのとしまで

そだてあげられました

七つのお母さんはお母さんになりました

わたしもくろろし父もくろろして

とてもおとうさんだけわたしたちをそだてあげられることはできませんので

まま母をもらい

たにんのつめたいお母さんにそだてられ

ようやくがっこうにはいり

あとお母さんには子供がたくさんうまれたからがっこういくにも

子供をおんぶして行ったり

天気の良い日にはひまをいただき

雨がふったりしたときはよいとなどといわれて

さいほうやいろんな本をもってがっこうの先生からてんきがあがつて

いそがしくなりましたからひまをくださいといってしかられたり

おまえはそんなにさいほうや本をたくさんもってきて

べんきょうがいやになったのかといわれたり

ようやく六年生まではいって

そつぎようしました

# 思い出すままに

浦河 克（市内在住）

「月刊かみのやま」、三〇〇号が最終号となることを知った。

電卓を手にはボタンを押す。  
三〇〇÷十二。すると、数字は二十五となった。二十五ということは……。

創刊より何年になるのかを確かめようとしたのだ。

二十五の数字とならば二十五年！まさか、そんなに！

それならばと数字を打ち直す。十二×二十五、すると、三〇〇の数字となった。小学校の頃に教わった検算の手法だ。

やはり二十五年か！ここで納得した。

毎月の二十七日、二十五年間、新たな表紙を目にしてきたことになる。

奥付を見ると、題字 故 木村蔵六とある。蔵六さんの名前に故の文字がついている。いつからだっただろうか。二十五年の歳月、あの人もあの人もと、幾人かの知人の命までも飲み込んでしまった。

その一人、うめつ住居研究所梅津孝助さん。

ページの端の広告をエントツ広告というのだそうだ。煙突、なるほど。何号であったか、その一枠、スポンサー名もメッセージコピーも抜け落ち、図柄だけになっていた。

気づいたのは当然、自分が係ったスポンサーだった。うめつ住居研究所。即、スタジオ・ワンに電話を入れた。電話の相手（編集人 岩井哲さん）、あわてる気配微塵もなく

「スポンサーの要望です」  
……、梅津さんらしい。洒落てる。そしてスゴイ！

彼は開高健のファンであった。それと、赤毛のアン。茅ヶ崎にある開高健

表紙絵は編集部制作がしばらくつづき、一五四号から一六四号まで折紙の吉田良子氏の作品の実写、そして一六六号から二八四号までの長期間竹内敏夫氏が担い、二八六号から二九九号を木村輝子さんの絵を掲載している。

いま、彩色された木村輝子さんの原画が図書館のカウンターに、控えめに展示されている。

モノクロの表紙からでは、原画の味わいの半分も、否、全く伝わらない。残念ながらしょうがない。

「月刊かみのやま」を手にする方は、是非、わざわざ行っても原画を直に目にすべきだ。「表紙のことば」と相まって、日々何気なく目にする光景も新鮮に映ることになる。

記念館に一緒に行こうと誘われたと気があった。自分の都合がつかなかった。悔やまれる。

彼は毎年、北欧、バルト海周辺の国々を旅した。現地からの絵ハガキが届く。

「とにかく美しい女性が多い所で困った!! アルメニア、エレバンにて」



今ではもう、届くことはない。

手元に同じ本が二冊になっていた。久木綾子著『稷の塔 羽黒山五重塔 仄聞』。

彼ならずごく喜ぶだろうと届けに行った。その時奥さんから知らされ

前回までの竹内敏夫氏の表紙、毎号楽しみであった。

ひとつが素朴なタッチで描かれたスケッチ画そのものを目にする楽しみ。もうひとつ「春の小穴」「仙石の春」「実の秋・権現堂」と、あちらこちらの風景、また、目にしたことのなかった高松観音「裸もちつき」の行事や「皆沢でツール・ド・フランスの応援」の光景を表紙絵から知った。

「表紙のことば」を読み、風景の中にある画伯の姿が見えた。

一六六号から二八四号まで続いたことを知る。約十年になる。

次はどこか、次は何か、と楽しんだ十年であったことになる。

「月刊かみのやま」の題字、今まで変わることはなかった。

た。彼は亡くなったことを。知らせるな、そのほかのことも一切お断りするようにと言われている、とも。本は彼の許へ届けてもらった。彼の静かな死を知った日だった。二十五年の歳月の中で、彼の死をも飲み込ませてしまった。

ある年の年賀状の季節であった。誰もが賀状の一枚二枚残るはず。残らなくとも一枚を「月刊かみのやま」に出しましょう、と誌上に記したことがあった。発行部数三千部。すると一割で三〇〇、三〇〇は無理としても一〇〇通の賀状が届くはず。

読者には毎月無料で配布されている。すれば、携わっている人達の苦労も吹っ飛び、また、ボーナス代りにでもなるはず。

年が明け、結果を知りたく問合せた。匿名で一通だけ届いていると知らされた。自分が出したものだ。

「月刊かみのやま」の最後のページ、時折、読者プレゼントの案内を目にす

る。応募ハガキが殺到することを知らされた。すると賀状の無かったのは誌上に載せた提案文が下手だったの読まれなかったのが原因ということになるのか。書いたのは誰か！ 私でした。

創刊から目にしてきた、表紙の小さな小さなアルファベットの文字

Monthly Local Magazine : Kamuyama

これほどまで小さな文字であることは、編集人の美的こだわりと見ていた。今では、この文字が見えない目玉になってしまった。

「月刊かみのやま」が消えるように、人生もまたしかり。しかし、その時がわからず。

人生に四つの季節があるといわれる。「青春期」「朱夏」「白秋」そして私

に残されている「玄冬期」。

昔、車メーカーのCMがあった。「物より思い出」と。

「月刊かみのやま」、形は消えることになるうが、思い出を残してくれた。ひとつひとつの思い出を杖にして徘徊の日々を楽しむことになるだろう。

## 村尾旅館さんの思い出

太田垣 徹（埼玉在住）

平成5年4月、私は両親を誘い、かみのやま温泉への一泊旅行を計画しました。前年に開通した山形新幹線に乗り、福島駅から米沢駅までの山間部では車窓に雪が吹き付けることもありましたが、「かみのやま温泉駅」に到

着した時は、すっきりとした青空が広がっていました。

早速、予約していた村尾旅館さんに向かいました。村尾旅館さんは、昭和天皇陛下がご宿泊された由緒ある旅館で、その時の御写真が廊下などに飾

られていました。お部屋にご案内をいただいた女将さんは、当時のことを私たちに優しく丁寧に説明してくださいました。両親はとても満足そうな表情で聴き入っていました。

旅の疲れを温泉で癒した後は、いよ

## 《寄稿》

いよお待ちかねの夕食です。料理が一品ずつ運ばれてくる中で、特にメインの米沢牛のステーキは、まさにとろけるような美味しさでした。普段無口な父が夢中になってステーキを頬張っていました。母も『今まで、こんなに美味しいお肉を食べたのは初めてよ』と喜んでくれました。

母は普段から父の健康を気遣い、父がビールを注文するとすぐに口うるさく注意するので、そのことで両親はよく喧嘩をしていました。しかし、今日ばかりは父の様子が余程可愛らしかったのか『お父さん、今日はビール1本だけなら注文していいですよ。1本だけです



からね。」と優しく父に言いました。

父は満面の笑顔で、運ばれてきたビールを愛おしそうに味わっていました。

就職して8年目の私の給料では、大分背伸びをして予約した村尾旅館さんでした。でもこれほど両親が喜んでくれて、二人が仲良く会話する姿も見ることが出来て、私は幸せな気持ちで胸が一杯になりました。そして少しだけですが、親孝行ができたのかなと思うことが出来ました。

今、両親は共に他界いたしました。が、家族の大切な思い出です。

随分遅くなりましたが、村尾旅館さん、あの時はお世話になりました。心より厚くお礼を申し上げます。

【註】…写真は全盛期頃のもの。離れの「浪漫館」には貴重な文化財も多々ありました。

# 住めば都

我妻芳徳（上山市在住・米沢市出身）

「住めば都」とはよく言ったものだ。上山市に引っ越して、早十九年が経過した。転勤族として、山形県内を北に南に通勤するのに交通の便からしてちょうどいい場所として居住を決めたのだった。市内に自宅も新築し、とても気に入っている。今年三月に退職、趣味の世界にどっぷりつかっている。いわゆる悠々自適な生活を送っている。

仕事一筋四十年、自宅（転居当初は賃貸アパート）と職場の往復のみの生活。意外と上山のこと（地理的なこと、特産品や伝統的な食べ物、その他伝統文化等）はよく知らなかった。最近では、徒歩や自転車、路線バスで観光スポットを中心に市内の至る所やイベントに出かけている。毎日が新たな発見で、ワクワクしている状況。「終の棲家」と決めた所以である。

生まれも育ちも米沢なのだが、生まれてから十八年過ごした実家を離れ高校を卒業すると同時に住処を転々とした。学生時代は、福島市と神戸市で過ごし、県内で職に就いてからは、県境の真室川町を皮切りに、寒河江市、天童市、南陽市、そして上山市へ。どこも多様な面で「住めば都」で住んでよかったことを振り返っている。上山市在住が時間的に一番長いのだが、過ごした時間に関係がなく、強く

印象に残っているのは、多感な学生時代を過ごした神戸市である。

「大きなタンカーや貨物船が浮かぶ瀬戸内海の碧い海を眺望する部屋で勉強する」という妄想的な夢を抱きつつ、どうしても弟子入りしたい（指導していただきたい）先生を訪ねるといふ現実の夢もあった。高校時代、決して勉強はできなかったが、日々、その教科書だけは首っ引きで毎日読んでいたものだ。著者は「兵庫県立〇〇大学教授」、ぜひ会ってみたいといつしか強い気持ちにかられた。偶然にも、二つの夢が叶った。住居は神戸線沿いのJ.Rの駅から、山道を登り十五分の高台の民家に間借りした。窓を開けると、瀬戸内海が一望。夢にまで見た景色だ。大学へは人生初の「電車通学」。J.R、阪神電車や阪急電車も並走し、十分毎に電車が来る、とても利便性が高い。大学も学園都市、やはり山の上にある。山道を十五分。本当に足腰のトレーニングになったものだ。早速、くだんの先生の研究室を訪問。その学問の世界ではわが国では第一人者。自著は五十冊以上。緊張しながら弟子入りを懇願した。もの柔らかい関西弁、硬い感じはなく、趣味は先輩から聞いたのだが演歌を歌うことだそうだった。

個人リサイタルも開催し、自費出版でレコードも作成市販。しかも、超有名な演歌歌手のファンクラブ会長だったか。温かいいつもニコニコしているが、指導はとても厳しかった。「違うやろー」という檄が飛ぶ。

先日、東根温泉街「湯けむりと珈琲フェス」というイベントに出かけた。県内外の珈琲専門店がテント市で軒を並

べる。チケット購入で試飲ができる。珈琲好きにはたまらない企画だ。上山市にも温泉がある。こういった企画は上山温泉でもできそうだ。毎朝、かみのやま温泉駅から眺める蔵王連峰が好きだ。晴天の日はまるで油絵のようだ。これからも市内の見知らぬ場所に出向き、ワクワクする感動を味わいたいものである。

# かわいかった私

（戦争を知らない）

吉川はる子（上山市在住）

私は今年八十三才になる。月刊かみのやまは294号毎月目にして、クイズに応募してみたり。今回は家族と父の弟家族で計六名程（うち子供三人）だった。記憶があるあの頃。私は小学四年生くらいに、リヤカーの荷台上に板を上にむしろを敷き父がリヤカーを引く人、父も若く力があつたんだ。家出発時は少し下り坂だった。何となく楽しく進む、途中まで来て事が起きた。リヤカーと自転車を繋ぐ縄が切れてリヤカーとバランスを取り田植えが終ったばかりの田んぼに落ちた。私は大声で泣いた事（たまげた）。私が大声で泣いた訳は九十才程になってた祖母より新しい（ぞうり）をもらい履いて行って来いと受け取ったため、再度上山へ出発進

行となる競馬場へ着く。あの頃は草競馬があり走路には砂が敷かれ、（見物の境目）には十メートル程の間隔で白い杭が立っていた。ここが競馬場だった。帰りは疲れもあり眠ってリヤカー姫になっていたため記憶はなく、家に着いてしまった。後日、母と兄達と花火を見に出かけた。今思うと金生の東宮橋で上げるらしいと出かけ焼おにぎりを持ち、道路にむしろを敷き寝そべって、イヤ〜きれいな、きれいと思いたる。帰り道は父の自転車の荷物になつたらしく家で寝ていた。この頃初めて見た（スイカ）流れ川に浮いてました。母の母に聞いてみた。あとで「割って食ってみる」現実、中身が何と赤い食べ物なんかなかった頃の話。

子猫らが秋空に遊び早めの帰り共にうれしく

紅葉色着て裾野まで笑い声楽し湖鏡と

# 追憶一九七九〜八〇

菅沼光昭（上山市在住）

昭和五十四年 北中三年

義務教育最終年なので卒業後の進路を決めなくてはなりません。勉強は好きではありませんでしたが農家の長男だし地元でせっかく農業高校がある、という理由で上山農業高を目指すことになりました。

しかし、金瓶に住んでいた級友が「あそこは不良学校、ツツパリしかない」と吹聴していて気の弱い私は志望先を上山高に変えました。その後の担任、親を交えた三者面談で担任から「どうして上高に変えたんだ？」と訊かれ理由を話したところ「上農は歴史と伝統ある学校なんだよ。」とよく分からない説得(?)をされました。父は父で「どこでもいいんだ、なにも（山形）東高でもいいんだじえ。」などと恐ろしいことを言い放っていました。

当時の入試は国数英の三教科三百点満点。山形市内の公立は望むべくもなかったので分かりませんが、担任は「上高を受ける人は百五十点、上農は百点以上とりなさい。」と言っ

ていました。学年主任なんかは「上農落って予備校行くなんてすんなよ！」と複雑な励ましをしていました。

今だと目指す学校選びに学校案内を見たりオープンスクールで雰囲気を感じることが普通のようなですが、受験当日に初めて上農を訪れました。大幅な定員割れだったこともあり、めでたく（でもないか）農業科に合格。卒業文集には「寄宿舎生活が待っている！」と題して新生活への希望で胸を膨らませていました。

昭和五十五年 上農一年

寄宿舎いわゆる自営者養成寮には農業科・園芸科・造園科の新生は必ず一年間入らなければならぬのですが、入寮しなくていい女子のみの生活科を含む新生への「洗礼」は入学前の想定を凌駕しました。

思いつくのも怖いので文献に頼ります。

（渡辺裕著『校歌斉唱！日本人が育んだ学校文化の謎』）  
——『入学した途端に体育館に缶詰にされて学ランのお兄

さんたちが仕切る『応援歌練習』などという行事に参加させられたときのことを「恐怖体験」として思い出される方などもあるのではないだろうか。——

当時の上農では屋上に集められました。絶叫できないと歌詞を覚えていないとみなされ、竹刀を振り回す上級生から前に連れ出され威圧されました。しかしある意味これ以上の衝撃だったのは様子を来た生徒会担当の先生（作

物の先生でした）が上級生へ「お前らほどほどにしておけよ。」との言葉を残しただけで帰ってしまったことです。

この瞬間、高校とはそれまでの義務教育とは全く異なる空間であることを思い知らされたのでした。ただ、上高生だった一学年下の妻によればこういった指導はなかったそうで今となっては上農入学を少し後悔しています。

# 祖母

長橋康夫（上山市在住）

祖母が亡くなってもう四十年になる。

私は幼少からばあちゃん子で跡継ぎだからか、ことの外可愛がられて育った。客が来ると「賢い孫だまあ」と人前をよく褒めてくれたようである。そしてまた、ひ孫に当たる私の子どもも可愛がってくれた。アルバムに当時八十一才でひ孫を抱いてニコニコ笑っている姿が写っている。

この間、法事の席で昔のご馳走の話になった。その時懐かしく思い浮かんだのは、祖母が作ってくれたビールの泡のような山芋の「トロロ汁」と手作りの「ふりかけ」だった。

畑で山芋を作っていたし、何より私のイチバンの好物だったから食べさせたい一心でよく作ってくれた。信楽焼の摺鉢に卸し金で摺り卸す。摺りこぎでトロロを摺り合わせていく。私の役目は、鉢が動かないよう両膝で挟み手でしっかりと固定する。そして薄い醤油味の程良く冷したダシ汁をくるくる回っているトロロに祖母の合図で少しずつ加えていく。そうすると徐々に薄茶色に変ってくる。鉢のギザギザと摺りこぎがカツカツと摺れる音が激しくなり段々と泡立ってくる。鉢いっぱいにはフワツとしてきたら出来上がり。

《寄稿》

《寄稿》



“ナショナル号” いま、まさに着陸



“ナショナル号” に乗る 右 清野源太郎氏

1955年9月15日「ナショナル号」が上山小学校校庭に着陸。主人の父親 故「大場義雄」がヘリコプターに意気揚々と乗り込み航空写真を撮りました。

当時の街中や樹氷の写真もありました。若い頃は写真を撮るのが大好きで暗室も部屋の隅に作り自分で現像までしていたようです。

皆さんの当時の思い出が甦る話題になれば幸いです。

若草美容院 大場美紀

これを冷めないうちに薪で炊いたご飯にタツプリかけて腹に流し込む。部活で夕方はいつも空腹だったから親の帰りを待ちきれず腹一杯食べ、後はもう動けなかった。アレは本当にもうまかつたなあ。

祖母オリジナルのふりかけに對し私はケチをつけ、特に気にいらなかったのがゴマの色だった。永谷園や丸美屋のモノは白ゴマだが祖母のは黒ゴマであつたから見映えが悪くニセモノだと思つていたのである。炙つた煮干しの頭を除き摺り潰す。削り節は醤油味にし軽くホウロクで煎り揉み潰す。煎つた黒ゴマとアオ海苔を混ぜ合わせて出来上がり。ソレは生温かく香ばしかった。アレこそ本物だつたと今つくづく思つている。手打ちうどん、コロツケ、カボチャの蒸しパン、クルミゆべし、かきもち、ごんぱ餅……祖母が知恵と工夫で作つてくれたご馳走はいっぱいあつた。

こんなこともあつた。その当時はどの家もカヤ葺き屋根だつた。私が小学生の頃、遊びでボールを屋根に放り投げ、下りてくるボールを野球のフライに見立てて捕球する。そうすると屋根が傷んでしまうため父に見つかると決つて止められていた。祖母は考えてくれ屋根にやさしいボールを考案してくれた。それはゼンマイの綿毛を一塊にして木綿糸でぐるぐる巻きにした綿毛ボールであつた。このように私ら孫を手をかけ心をかけ大切にしてくれた祖母だつた。

親付けの名マシメン

**丸松物産株式会社**

山形工場 山形県上市市新北浦3番地 TEL:023-673-5511  
東京本社 東京都世田谷区代田1-47-2 TEL:03-3419-1611  
<http://www.marumatsu-mb.co.jp>

# 『月刊かみのやま』よ。ありがとう。

公益財団法人上山城郷土資料館学芸員 長南伸治

上山について（歴史・文化、等々）知りたければ、まずは何を読めばいいのかわか？この問いに対して、今のところは『上山見聞随筆』（上山の「町人学者」菅沼定昭が文久元年～明治二十九年（一八六一～一八九六）の間に資料を収集し、明治三十五年に編纂を終えた書籍／【添付画像参照】）、または、『上山市史』（原始時代～現代に至るまでの上山の歴史を記した書籍／上山市史編さん委員会（編）・上山市（発）・昭和五十五～同六十年（一九八〇～一九八五）／【添付画像参照】）を読んでみては？と答えるのが、無難、かつ、的を射た「答え」といえる。

しかし、これからは『月刊かみのやま』も忘れてはいけない！と一言付け加えることが、正しい「答え」の在り方となるだろう。



現在に至るまで二十五年間。毎月発行し続け積み上げた号数は三百という膨大な数字に上る。そして、それらの誌上には、上山の歴史・文化・芸術・自然・スポーツ、上山に所縁ある人物のエッセー、生き字引達の回想文等々、編集サイドの豊かな発想により生み出された多彩な話題が並ぶ。

この積み重ねられた「時間・号数・内容」から、『月刊かみのやま』は、『上山見聞随筆』・『上山市史』と並ぶ、上山を学ぶための基礎的文献の地位を獲得しているといえる。また、「親しみやすさ」の観点から見れば、先の二つの書籍を既に凌駕しているといっても間違いはないだろう。

今から十三年前。筆者は上山城の学芸員として、縁も所縁もない上山の地にやってきた。生来の人見知り・引つ込み思案ゆえ、どうやって地域に溶け込もうかと、結構重めな

不安を抱いていたが、それは杞憂に終わった。なぜなら、『月刊かみのやま』の巻頭頁「上山城からのたより」に、編集者岩井哲氏のご配慮により定期的に寄稿する機会を得たからである。

平成二十四年六月の初寄稿から現在に至るまで、寄稿数は気づけば計九十八回にもなる。おかげで、市民のみならず私の存在を認識してもらえたことは至上の喜びだった。また、文章が「老けた」印象を与えていたらしく、お会いした方々に「意外と若い人なんだね（笑）」と言われたことは良い思い出となっている。

そして、その寄稿数が示すように、これまでの私の上山での歩みは『月刊かみのやま』と共にあったと言っても過言ではない。顧みれば、よく書けた文章もあれば、いまいちだったも

の、感情任せに書きなぐったもの。その内容をほめられたり、苦言を呈されたり、本当にいろいろあったが、その都度、『月刊かみのやま』の周囲に与える影響力の凄さを思い知り、かつ、そのような雑誌に執筆できることに感謝の念を覚えたものだ。

しかし、もう書くことはできない。本音を言えば「残念」「悲しい」の他に言葉はない。だが、今後は『月刊かみのやま』から「与えられた」財産を胸に、今度は自分が誰かに「与える」側にならねばと、終刊を機に思いを強くしたことも確か。こう思えるようになったのは、これまで『月刊かみのやま』に育ててもらったお陰なのかもしれない。

最後に万感の思いを込めて叫びたい。「さようなら。そして、ありがとう。『月刊かみのやま』よ！」

## 《レギュラー》

春色で彩る、私の毎日。



ソフィア  
**SOPHIA**  
tel&fax. 023-673-0517  
上山市南町2-7

泡エステで10歳、若返りませんか！

ムース♡デコ



- ♡ニキビ・吹き物
  - ♡美白・リフトアップ
  - ♡毛穴の黒ずみ
  - ♡シミ・小じわ
  - ♡手の荒れ
  - ♡アトピーなど
- 特許取得  
原点に戻った新発想  
他店にはないメニュー！

**アライ美容院**  
ご予約: 673-3002



上山市金生東二丁目  
023・673・3103

わが町再見『藤井松平』⑧松平信室(1)丸野清耕  
祝賛 上山藩御用絵師丸野清耕の問いかけ(謎、解けますか?)

鎌上 宏  
(水岸山観音寺住職)

藩御用絵師丸野清耕に不思議な絵がある。「蝦蟇仙人、鉄拐仙人の術比べ」だが、この絵はどこから生み出されたものか。

純然たる仏画ではない。山水画、神仏思想の絵でもない。儒教の天尊でもない。新道教とマニ教が混じり込んだ禅林道釈仏画に源流をもつ。新道教全真教は、南宋代(一一二七)に活躍した李鉄拐、劉海蟾を祖師として布教をすすめた。南宋に学んだ日本学僧は、従来の三蔵、仏画、祖師像のほかに自由に表現できる道釈仏画も研鑽した。雪舟は(一一四二〇)梁楷(一一二七)の減筆風、牧谿(十三世紀後半)の深遠な画風を学び、世阿弥(二三九七)は顔輝(十三世紀)に学んだ。

南宋・元「画の六法」の一つの代表が顔輝(南宋末)の「蝦蟇鉄拐図」寒山拾得図である。李鉄拐、劉海蟾を描く

「蝦蟇鉄拐図」(百万遍知恩寺蔵)は、中国に残らず現存唯一である。それは吉山明兆(一三五二)「達磨蝦蟇鉄拐図」

(東福寺蔵)、雪村周継(一四九二)「狩野探幽(一六〇二)」「達磨蝦蟇鉄拐図」(南禅寺蔵)となり、時代を導く狩野派、また長谷川等伯(一五三九)、琳派(宗達・光琳)に展開した。しかし、「宋元仏画」の深流は曾我肅白(一七三〇)、原在中(一七五〇)に根づき、「蝦蟇鉄拐図」筆様は直截に魂の象表現をとった。

その蝦蟇・鉄拐両仙人の趣意は、劉海蟾が背負う三本指「青蛙神」(蝦蟇・蟾蜍)はもとにかえる運を象徴し、片や靈氣を吹いて魂遊離を自在にし死からさへ蘇る李鉄拐仙人。上山藩御用絵師丸野清耕(一七八四)一八四三)は、江戸の中橋狩野家十四代邦信に師事し画風を学

んだ。その「蝦蟇、鉄拐」の図柄系譜は狩野(探幽)派に学ぶ故に仙人は半身絵である。

さて、風貌寒山拾得に似た蓬髮垢面、しかし不思議な「蝦蟇、鉄拐仙人」だが、現在最上三十三観音二十九番最上町富山観音に奉納されている。住職談、戸澤藩主から奉納とのこと。画に落款「(丸野)清耕」朱文方印、日付「天保十三辛丑(一八四二)」がある。

上山藩領主松平信室は父信行より天保二年(一八三一)に家督を継ぎ、天保五年(一八三四)に新庄戸澤藩主正胤の秀姫を娶った。しかし、翌年(一八三五)七月十七才で死去。上山藩から贈られた天保十三年(一八四二)日付の絵をどう見るか。妻の七回忌香資と見ることもできるが、秀姫の父戸沢正胤は天保十一年(一八四〇)年三月に退隠、その後次男

《レギュラー》

シニアの方大歓迎!

カラオケ開放 11:00~16:00  
持ち込みOK!(酒以外)  
歌い放題 お一人様 ¥1,000  
◇3人以上でお申し込みください。  
◇定休日:月曜日

「熊ラーメン」  
おぐにのマタギ  
上市市新湯2-19  
サガ・ソシアルビル2F  
TEL.090-2950-2791

正令、孫正実の後見役を務めた。治世中は家中騒動、財政逼迫に面するが、儉約、勸農、織物など殖産振興に努めた。上山藩主信宝侯は自らの父信行の奮励の姿を舅にもみ、ねぎらう退隠記念(祝い)として画師の構想を承認した。清耕には永年の集大成、畢竟の力作、絶筆の画である。

「丸野晴耕からのお祝い」  
表現は、隠された内証を描き、外化表現する。  
画家は、自らに宿された魂を、表象化し、書き、刻み、塗り、抛り投げ、外化して、鎮め、遠い未来に届ける。後人はそれを学び、踏み台にするであろう。「仙人図」は、今過ぎ去る現在の退隠祝、未来への寿きた。

上山の魂、文芸伝統は、「月刊かみのやま」に受け継がれ、豊かさを、掘り下げ、絆を、紡ぎ、街に灯りをかかげてきた。だけなく、書き手自身の裡に潜む象を、刻み、晒し、過去化することで成長させつけた。  
わたしたちは、それを未来に託していきたい……。



元代顔輝作蝦蟇・鉄拐図



上山藩御用絵師丸野清耕「蝦蟇鉄拐図」

※参照:「宋元仏画」(京博特別展図録)、「武田喜八郎著作集」、「上市市史」、資料集「御傳記」①ほか。  
※歴代藩主順を変更して「月刊かみのやま」300最終号(賛)特別稿とします。

こんな困りごとありませんか?



宝石・メガネ・時計

タニエ

上市市石崎2丁目1番33号  
☎023-672-0364  
携帯:080-3330-6973

二十八回だって。なんだかんだ間もなく三十回だね。ああ、でも三〇〇号でこの冊子は終わるのか。(あれ、これってもう公表されたんでしたっけ？されてるよね…?)ということは、このエッセイは二十九回が最後ですね。僕も来年二十九歳。二年後は三十路。なんか、いいですね。


青森に住む友人A子が、「周りが結婚ラッシュで大変」とこぼしていたのを、少し前まで「そうかい」とぼんやり聞いていた。自分の周りには結婚した人もしそうな人もいなかったからだ。それが最近、同い年の従姉妹が結婚して。弟が結婚することになって。両家顔合わせとかに出席しちゃって。

振りが雑すぎやしないか、と笑った。(あ、同僚たち皆歳近いし仲も良いですよ。)普通に答えるのもなんだかちよつと癪な気がしたので、

「ん〜、ああ、この前、指輪を捨てたりとかはしましたよ」と答えた。そして予想通りの同僚たちの反応。

「朝日さん彼氏いたんですか?!」

あー…そうか、「世の中の的に」はそうか、そうだった。もういいか。「いや、私、恋愛対象男性じゃな



水岸山慈眼院  
**観音寺**  
最上三十三観音第十番  
上山三十三観音第一番  
山形県上市市十日町9-29  
電話 023-672-1421

**吉井内科胃腸科  
クリニック**

診療時間【木曜日休診】  
月・火・水・金・土  
A.M. 8:30 - 12:00  
P.M. 2:00 - 6:00  
但し、土曜日の診療は4:00迄

院長 吉井 英一  
**023-673-7515**  
上市市金生東一丁目10-15

**成人写真  
卒業写真  
入学写真**

ご予約承ります  
**高橋写真館**

TEL 023-672-0541  
営業時間 9:00~18:00 受付日 水曜日  
山形県上市市十日町9-29

いんで。指輪渡して受け取ってもらった女の子に振られたんで、そろそろ手放そうかなと思って。きつと「大丈夫な」人たちだから、もういいや。

月刊かみのやまでの連載もあと二回だから。万が一、僕のエッセイをずっと読んでくれていたる変わり者の読者がいて、万が一僕の性別はなんだろうとモヤモヤしている素敵な感性をお持ちの方が今もこれを読んでくれていたならば、そろそろ答え合わせをしてもいいかもしれない。

誕生日ケーキはいつの間にかショートケーキになったのでロウソクは刺さなくなつたし、代わりに焼肉をご馳走になれば主役の私は胃もたれを起こしてその場で吐いたし、一緒に食べた祖母の方が元氣だった。三十の時はホールケーキを買ってきつちり三〇本ロウソク灯してみようかな。いっそ燃やしてみようかケーキ。きつと僕の友人たちは喜んで一緒に燃えるケーキを囲んでくれる。そんなくだらなさでずつと笑える人たちがいる。それが僕の今の一番の幸せ。

は出会ったわけですか？でも未婚なんだね？なんて意地悪は言わな

いけどさ。そりゃね、この先判らないよ、そう思える人ができるかもしれない。結婚という制度も、選択肢に入れることもあるかもしれないよ。その時に一緒にいたいと思えた相手が結婚できる性別ならね。でも、それでもそうで

なくても、未来の自分も「どちらでもいい」と思うんじゃないかな」と思う。もちろん、法に守ってもらえなきゃ困ることもあるんだけどね。

この前、退勤コードを切つて、帰り支度をしながら、アプリを頑張る恋多き同僚が「もう年末ですね、今年は好きな人が四人できたな」と大きめの独り言を吐いた。

「……それって、突っ込んだ方がいいやつですか？」

「え、びっくりした誰も反応してくれないかと思った」

「いやびっくりしたのはこっちですよ」

「朝日さんは今年何人ですか？」

# 何でも短歌にしてみる

新寺 登  
(上山中部短歌会会員)

これまで短歌随筆と称して寄稿してきましたが、最後にあたり私の日頃の暮らしとそれにまつわる短歌を思うままに書いてみたいと思います。

退職をせず始めたのが山登りである。最初は千歳山などの里山巡りから始まり、私には無理だろうと思われた大朝日岳にも登れるようになった。中でも月山はそんなに頑張らなくとも高山の気分を味わえる身近な山となった。残雪と青空、ブナの眩しいほどの新緑、紅葉と笹の目の眩むような赤と緑の模様、何度見ても感嘆する。山の中にいる時が一番楽しく、とても旅行までは手が回らなかった。

○雲かかる行者の山の朝焼けに

風にわたりて法螺の音きこゆ

○山毛櫨の幹に両手を回せばやはらかに

若葉の山にわが身とけゆく

登山とともに嵌まってしまったのが山菜採りである。春のタラの芽に始まって十二月のヒラ

の美術の時間に描いたのが最後である。種々の美術展に入選している皆さんに交じり自分なりに楽しんでる。

○ひまはりの絵を描きたしと春風に

キッズスマイルてふ種を播きたり

○モネの絵のガラスの文鎮陽をうけ

ページの上に睡蓮にはふ

また最近特に感じるのは晩酌が一段と待ち遠しくなったことだ。夕食が終わってから改めてウイスキーをストレートでチビチビやりながら昔の映画や歌を聴くのが日課となつてしまった。

○黒髪の黒き衣装のグレコ遊ぶ

都に枯葉のふりちる前に

茸まで多いときは週に四日位は山に入る。食べるより宝探しの感覚で脳が刺激されるのがいい。

○タラの芽をボキツと挽いだ夢を見て

けふはおにぎり三個に増やす

○野分き去り乗の実落つる里山に

縄文人となりきり拾ふ

家にいるときは大抵本を読んでいる。子供の頃から本が好きで今も頻繁に本屋・古本屋に行き買い積んでいる。読むのも好きだが買うのが好きなのである。これから先、書架の本の大部分は読まれぬままで終わってしまうだろう。

○半世紀書架に置かれし『悪の華』

見知らぬ世界に惹かれしままに

○うらなりのその後は如何に夏休み

屋根に登りて読みし『坊っちゃん』

それから自分でもびっくりしているのは、絵などやったこともないのに上山美術会に入ったことである。絵を描くことは好きだったが中学

○マリー・ラフォレ死すとの報によみがへる  
太陽あふるるイスキアの海

私が短歌を続けてこられたのは、日常の何気ないことにも目がゆくようになり毎日新たな気持ちで過ごすことができるようになったからと  
思っている。

また上山中部短歌会に入ったおかげとも思っている。平成三十年に上山中部公民館主催で短歌講座が開催され、これが機縁となり上山中部短歌会がスタートした。講師は鎌上純子先生である。月一回、みんなの短歌を語り合うのは大変楽しいことである。

○十人の普段の暮らしが現れて

語らひ止まぬ短歌教室

《レギュラー》

春色で彩る、私の毎日。



ソフィア  
SOPHIA  
tel&fax. 023-673-0517  
上市市南町2-7

泡エステで10歳、  
若返りませんか！

ムース♡デコ



♡ニキビ・吹き出物  
♡美白・リフトアップ  
♡シミ・小じわ♡手の荒れ  
♡アトピーなど  
毛穴の黒ずみ  
手荒れ  
特許取得  
原点に戻った新発想  
他店にはないメニュー！

アライ美容院  
ご予約:673-3002



上市市金生東二丁目  
023・673・3103



# 連載随筆 ⑩ 湯の街の春に

橘 千枝  
(エッセイスト)



「この冬、この街は不思議と雪が少なかった。「これで終わり?。」と半信半疑だったが、順当に春が来たみたい。県内でも他の地域では大雪だったから、自分たちだけ楽をしたようで、引け目を感じてしまうのは雪国生まれの習性か。春が来て、月刊かみのやまも最終号。お疲れさまでした。

書くようになってからは常に題材を求め、頭の中で文章をこねくり回している感覚。実際にアウトプットして書き始めると、あつという間に書ける時もあれば、言いたいことを上手く伝えられなくて四苦八苦することもある。

我ながら面倒くさい人間で、子どもの頃からずつと葛藤している。世の中は理不尽で不条理なことだらけで、自分一人ではどうなるわけもないと理屈

ではわかっていても、どうしても許せなくて。努力しても必ず報われるわけじゃないという当たり前のことにも、これまた納得できずに暴れてしまう。息子は、「お母さんは何と戦っているんだ?。」と言う。きっと、自分に満足できない自分と戦っているのだろう。こんなもんだと、悟りを開けない未熟な人間だ。

しかし友人に言わせれば、私の悩み事など「お嬢さまの戯言<sup>たむこと</sup>」なんだぞうな。確かに、明日の食べ物に困ったことがあるか? 戦争や災害で逃げ感ったことはあるか? と問われれば、そういう極限の状況の中にあつたら、どうでもいいことの類いだろう。器を超えた理想を自分に課しているから苦しいのだと、客観的に見下ろしている自分もいる。

人生の節目々々で、良かれと思いついた行動が、ことごとく裏目に出たのは、自分の努力不足もあるし、努力してもどうにもならなかったものもある。若い頃は死んだ方が楽なんて思つたこともあつたが、今はもう、そう遠くない未来にお迎えが来るのだから、考えたつて仕方ないと思えるよう

になった。「人生いろいろ〜♪」。

そもそも、努力とか理想とか、そんなことばかり考える偏狭な人間なのだ。絵本作家の五味太郎さんが「若い時は自己発見が大切で、自分がやりたいと思うことを、なるべく我慢しないで懸命に探すこと」と語っていた。そんなこと、子どもの頃に言われたかかったな。幼い頃から、もう親に人生のルートを決められていて、そこから外れるとダメな人間と思わされて育ち、自分で探すなんて考えもしなかつた。今でいう洗脳ってやつだな。

だから早くに自分の道を見つけて、まっすぐに進んで行く若い人を見ると羨ましくなる。

人生の岐路に立っていた頃、地域総合誌「やまがた街角」に文章を書き始め、以来、書くことで救われた気がする。「お嬢さま」が、やつと自分で選んで生きられるようになったのだろう。自分でも何を書いたか思い出せない程度だが、十数年前の文章を読み返すと、今と同じことをグチグチと書いているから、世の中も自分も進歩していないのだろう。良く言えば自分の信念

は通っているのかもしれない。最近、母の夢を見る。母は人を学歴と職業でしか見られない哀れな人間だった。しかし夢の中の母は穏やかな日常の姿で出て来る。母も自分と同じく葛藤していたのだと、やつと和解できたのかも知れない。

人生は一度だけ。まもなく否応なしに人生の冬が来る。後悔や反省は数限りないけど、もう後ろは振り返らず、今ある春を感じながら、もう少し頑張ろうと思っている。ありがとうございます。

## 《レギュラー》

**いも煮**  
2~3人前  
(6コ入り)  
¥6,600  
(税込)

地元「上山」のお土産に!!

**丸松物産株式会社**  
山形工場 上市市新北浦3番地  
TEL.023-673-5511  
http://www.marumatsu-mb.co.jp

**手づくり洋食を**  
ご家族連れどうぞ

レストラン  
駅東口より徒歩5分

**イビサ** 023-673-3034  
営業時間 11:30~21:00 定休: 木曜日  
(日・祝) 11:30~21:00 (祝除く)

ご商談・ご宴会に  
二階宴会場をご利用下さい

割り子そば

石臼挽きそば

**みつひろ**  
上市市新湯6-34  
TEL.672-3815

# わが古里 上山を想う 少年時代 Ⅱ

櫻井和敏  
(上山市出身・山形在住)

## 1 『イガグリくん』に憧れて

昭和三十三年四月、上山市立上山中学校に入學しました。授業は小学校と異なり、教科担任ごとの授業で大抵の先生にはニックネームがあり、その名はよく覚えていますが、フルネームは今でも思い出せません。当時の私はマンガの影響が大きく、冒険王の熱血柔道の連載・有川旭一作の『イガグリくん』の愛読者でした。入学早々柔道部に入部しましたが、先輩たちの体格の大きさにびびりました。黒帯を締めている数人の先輩のカッコよさに憧れて、いつか自分も……と練習に励んだものです。小柄な私は『乱取り』に入ると、投げられっ放し。投げ方よりも受け身を体得したのは今でも役に立っています。転んでも反射的に体を丸めて頭を守り地面を叩くので怪我をしたことはありません。

上山市内の各中学校の運動部による中体連が夏休み前に行われました。その応援歌がありました。『おお高らかに叫ばーん、KAMITYU! 燃ゆる日のひびきこそ……』

その中体連で我が柔道部が優勝したことをよく覚えております。生徒会長三年生のSTさんとその数ははつきり応えられません。しかし今現在私なりにはつきり数えることができます。結局は『竹馬の友』に尽きるところです。小・中学校からの親友、高校からの親友、大学からの親友……十人に満たないのです。特に小学校以来の親友はたった二人しか居りません。その友人を『莫逆の友』と言いたいです。

同級生だった佐藤(旧姓岩田)正雄君は小学校の頃から『音楽の神童』と言われ、木琴から始め、マリンバ、ビブラホン、ピアノと幅広く楽器をこなし高校卒業後は福島県のカワイ楽器KKに就職し、福島中央テレビの某番組のレギュラーとして活躍しました。故郷上山ほか山形市でも彼のリサイタルやコンサート等で人気を博しました。将来、私と和洋楽器コンサートなど

SKさんの一本勝ちは見事なものでした。部顧問の遠藤利一先生は先日議院議員の選挙第一区で初当選した遠藤寛明氏の祖父です。先生の指導方法は「だらだらと練習するよりも、精一杯打ち込んで短時間で切り上げる」のがポリシーで、その日は他の運動部よりも早く帰宅できました。

## 2 上山中学校の大火災

昭和三十四年十二月二十四日午前零時を少し回った頃と思います。けたたましいサイレンの音が街中に鳴り響いた。外に出てみると真南の夜空に大きな火柱が間近に見えたので明治製菓上山工場と早合点しました。すると近所の男性の怒鳴り声が聞こえました。『上中火事だどー!!』私は信じられずにいると一年先輩のの氏と私の弟と取りあえず現場に向かったのです。通行禁止の畑道(通称恵の道)を通り抜け、宮川の土手にたどり着くと大勢の人々が固唾を飲んで見守っていました。数十台の消防車が消化に必死ですが、火の勢いがありにも強く鎮火には至らない様子で全焼かと思つた程でした。東

北一を誇る放送設備が整った放送室から数回の爆発音と青白い光が印象に残っています。火事の原因は不明のままですが、職員室とそのちょうど二階が私の教室(二年E組)その隣に図書室があり、一緒に燃えていたとの証言もありました。体育館を残し、校舎の約三分の二を焼失した大火災だったので。三年生は三ヶ月後に高校受検を控えているので焼失しない教室は使えませんでした。

下級生の教室については体育館を仕切り、仮設の教室が造られるまで数日を要しましたが、午前と午後の二部授業が余儀なく開始されました。何しろ天井が無くベニヤ板の仕切りなので授業中の先生方の声の方々から聞こえてきました。窮屈な学校生活でしたが、翌年は鉄筋コンクリート三階建てモダンな校舎が半年ほどで落成し、私たちの学年から新校舎に入ることができたのです。

## 3 莫逆の友

「学生時代の親友は何人いましたか？」と尋ねられると親友とはどの程度の付き合いなのか、られると親友とはどの程度の付き合いなのか、程の人物だったと驚いています。

平成二十八年秋の上山かかしまつりで私の作詞・作曲した『かみのやま温泉・湯の町ラプソディー』の演奏に新潟市からわざわざ応援に駆けつけて来られたのが今生の別れでした。令和三年六月に病死されたのは至極残念でなりません。

毎日眺めることはできませんが、秀麗蔵王山の雪景色が何よりも素晴らしい。そして母のように温かく見守ってくれた三吉山は「お帰りなさい」と呼びかけるのです。

わが愛する古里よ、永遠に栄えあれ!

## 《レギュラー》

◆おかげさまで売れています!

猫の手マドレーヌ  
「わんわんどーナッツ」  
「しっぽフィナンシェ」

ナニ屋本店  
上山城登り口西六七一〇一六九

協賛していただける  
スポンサー様を募集  
しております。

文化的に潤いのある故郷  
づくりに、少しでも寄与出来  
たらという願いをこめて、  
2001年5月号より発行し  
続けております。  
ご協賛頂けたら幸甚です。

ご連絡は  
電話 090-3363-5978  
FAX. 023-673-2023迄

ソフトクリーム  
コーヒー  
ヨーグルト

悪い酪農家

山川牧場  
(有)蔵王マウンテンファーム  
山形県上山市永野2191-23  
TEL・FAX 023-679-2150

# 観光ボランティアガイドの とっておきのお話

## 第四話

大貫 和春  
(上山市観光ボランティア)

私は上山市で観光ボランティアガイドをしておりますが、以前山形市でも四年ほど観光ボランティアガイド(通称まちなみ案内人)をしていました。まちなみ案内人は霞城公園で観桜会が行われる期間中、臨時の観光案内所を設置して、来場されたお客様にパンフレットを渡したり、要望があれば公園内を案内したりします。二〇一一年に臨時の観光案内所で奇跡に近い(自分ではそう思っている)再会がありましたので紹介します。

いつもの様に臨時観光案内所で待機していると、「(庄内弁で)庄内から来ました」という女性が案内所に来られました。私が「庄内、懐かしい!! 小学校三年まで五十川にいました」と話すと、彼女は「その五十川から来ました」と話し、同年代と思ったのでしょ

う。「担任の先生は誰でしたか?」と聞いてきました。私が「大井節子先生でした」と答えると、「えー!!」と絶句。彼女は「富樫(旧姓)悦子です」と名のり、私も「大貫です」と名のると、なんとお互いクラスメイトであることが分かったのです。お互いに名前を覚えていたことも幸いし、小学校三年

生以来、五十年ぶりの再会でした。黛まどか氏が「奇跡の四国遍路」で語っていた「偶然の重なり」による再会でした。もし、あの時案内所になかったら、そして、五十川に住んでいたことを告げなかったら、この再会はなかったでしょう。この再会をきっかけに五十川小学校のクラス会に参加したり、クラスメイトたちが山形を訪れたり、交流が始まりましたが、その後五十川小学校は児童数減少を受け、二〇一六年三

月に隣の温海小学校と統合され、閉校となりました。最後に、山形市の観桜会での珍事を紹介して終わりにします。その珍事は二〇一三年四月二十一日に起きました。朝、起きると何と数センチの雪が積もっていました。霞城公園の桜は満開で、連日多くの花見客が訪れていました。そして、その日は日曜日



したから多くの花見客の来場が予想され、長くつを履いて霞城公園に向かいました。霞城公園内は一面真っ白で、桜の花も雪で覆われていました。当日も多くのイベントが予定されていましたが、主催者の判断ですべて中止となりました。ただ、満開の桜に雪が積もるといって、滅多に見られない光景に多くのカメラマンが訪れ、盛んに写真を撮っていました。私も公園内をあちこち歩き回り、何枚も写真を撮りました。

翌日の山形新聞は「桜隠す雪の花」との見出しで、二十一日の県内は、低気圧と寒気の影響で朝から断続的に雪や冷たい雨が降り、山形と米沢では同日の最高積雪が

午前十時十一時にそれぞれ六センチと十二センチを記録した。日中の最高気温は全般的に平年より十〜十四度も低く、各地とも二月並みの寒さで経過した。山形市の霞城公園では、満開となった桜に湿った雪が降り積もり、春から真冬に逆戻り。花見に訪れた観光客らは一様に驚き、薄いピンク色の花と真っ白な新雪のコントラストを写真に収めていた」と紹介していました。

※鶴岡市(旧温海町)五十川地区はかつて炭鉱の町として栄え、最盛期には五十川小学校の児童数は七百人ほどいたが、一九六〇年(昭和三十五年)鉱山が閉山されると、鉱山従事者は五十川を離れ、一気に減

少。百人を割ったと山形新聞の特集「わが心の学校 鶴岡市五十川小学校」(二〇一六年五月二日号)にありました。鉱山が閉山すると、北海道の夕張炭鉱や埼玉県草加市の会社に集団で移籍する人が大勢いた中で、私の家族は山形市に移住しました。五十川では長屋住まいで、隣の家族はプラジルに移住したと親から聞きました。ただ、鉱山閉山後は五十川に清流が戻り、五十川小学校は「サケの学習」として児童が採卵から稚魚になるまで飼育し、卒業式には全校生徒がサケを放流する様子をニュースで見た記憶があります。

### 《レギュラー》

山形県知事許可「高度管理医療機器等販売業許可証」取得店  
最適な補聴器。ブラピンモライト。

デジタル補聴器  
耳掛型  
“無料試聴貸出”中!

耳あな型片耳価格 138,000円  
ボリュームコントロール付 148,000円(片耳・非課税)  
248,000円(両耳・非課税)

計測室 補聴器  
エフ・バルク  
F. paric 佐藤  
〒999-3143 上山市二日町9-1(矢来橋ギワ)  
TEL.023-672-0207

いなげ花店

上山市矢来一丁目3-18  
(かみのやま温泉駅前)

駅前本店 TEL.672-0157  
FAX.672-6760  
ヤマザワ店 TEL.673-1343

くだものうつわ  
各種ご贈答にも最適

上山市金瓶水上6-2  
Phone: 023-672-5861

# ぶらぶらスケッチ日記 (13)

《振り返りと、これから》

竹内敏夫  
(上市市在住)

最終稿です。表紙絵を10年、記事を1年担当させていただきました。如何だったのでしょうか？

まず思い出すのは、表紙絵を引き受けたとき、真っ先に「春秋上山」の表紙絵・原田豊さんの上山の風景が思い浮かび、自分も「上山の風景や諸行事を描こう」と決めたことです。

「春秋上山」は私が上山に住むようになった頃にはありました。昭和56年の創刊号に依れば、上市市文化懇談会が「市内で活躍する文化団体の交流を深めるために発行する」という趣旨を岩井益富会長が記しております。

凡そ二十年続き、主に渡辺春雄先生が編集されてきました。先生との出会いは、本誌295号に記しましたが、平成4年(34年前)に上市市民会館でやっ

た県民芸術祭開幕式典「かみのやま今昔物語」公演です。そのことは「春秋上山24号」に式典経緯や台本・スタッフ・キャスト・参加団体と参加者名まで詳細に掲載されており、まさしく文化団体の交流を実現していたのです。余談ですが、このたび「春秋上山24号」

冊子を読んで私が大きく思い違っていたのに気づきました。沢庵和尚と思っていたが月秀上人でした。また、月秀上人を演じた方は松山の長岡正彦先生と分かり、驚きました。当時は面



昭和30年3月 香曾我部先生と  
小学3年生 恩師

識がなく、その後先生と知り合って沢庵堰を案内していただいたのに気づかず大変失礼しました。話しは変わりますが、月刊かみのやまに携わったことで、佐藤藤三郎さん(以後「藤三郎さん」)にも出会えま

した。私に絵を導いてくれたのは、小学一年から三年間担任していただいた香曾我部はな先生で恩人です。「としおちゃんは図画が、上手だね」と、褒めて貰ったからです。先生に、藤三郎さんと親戚だと聞いて

おりましたので、このことを岩井さんに話したら、「山元のお宅に行ってみなさい」と勧められてお会いできました。そのとき「はな先生は父の妹(叔母)だ」とお聞きして、人々を結ぶ不思議な糸があることを実感しました。表紙絵で、こんなことがありました。『四谷の歩道橋』が表紙絵に載ったとき、「上小生が絵に描いてあるのでカラーコピーを学



上山小学校5年生の絵手紙指導

校に展示させてほしい」という電話がきました。了解すると電話主が来宅されて「もう一つお願いします。五学生(約百名)に絵を教えてください」と。

私で良ければと了承し、翌月各組45分ずつ三教室を移動して、「真夏の落ち葉」の絵手紙を描くお手伝いをしました。小学生に絵の指導する自信は全く不安でしたが、後日届いた生徒さんからのお礼状

を見てホッとしました。二年前(日24)に電話で依頼してくれたのは市学校教員課の遠藤靖さんでした。

これがきっかけで今も学校を訪ねて生徒集会や学習中の様子を描いて楽めています。それで最近、上山城と二日町プラザ二階で小学生から「竹内さん、こんにちわ！」と挨拶いただきました。どちらも絵手紙をした上小の六年生でした。とっても嬉しかったです。この挨拶は、これからも頑張りなさいという励ましと、「月刊かみのやま」に關らせていただいたご褒美だと感謝しております。

《レギュラー》

大切な家族の一員  
だったペットの  
供養をいたします



納骨供養料  
15,000円 (納骨料・供養料)

葬儀のご相談も  
承ります

※毎年9月の動物愛護  
週間中の土・日に  
供養会を行います

ほうらい いん  
蓬菜院

上市市小穴42番地  
TEL 023-673-2909

ワイヤーカット加工による金型部品加工  
金型・治工具設計製作

有限会社  
山上企画

〒999-3122 上市市仙石1263番地5号  
TEL. (023) 673-1114 FAX. (023) 673-1115

有限会社  
大崎金型

〒981-3604 宮城県黒川郡大衡村駒場字砂右衛門橋 3-162  
TEL. (022) 345-5378 FAX. (022) 345-5378

# 新たな火を灯そう

佐藤 藤三郎  
(著述業 農業)

「月刊かみのやま」が三百号で終刊になる。という知らせの文を目にして、私は言葉には出せない多くの思いで頭の中が雨雲のようになつていた。三百号まで続けられたその時間と労、それをただ「ご苦労でした」などとはとてもいえないのである。

毎月送り届けてくれた「マスコミ市民」という雑誌も発行を止めることにした、というが、その理由を改めておききしてはいないが、それには何か通じるものがあるように思えて心空しくなる。

天童の「ひろば」という雑誌もなくなった。地域文化の活動に命を費やすようにしておられた鈴木実美さんが逝去されたあと、それをつないでくれる人がいると聞いていないのが悔まれる。

それらのことを合わせて思うと、今、この国の文化が大きな転換期にさしかかっているように思えてくる。そしてまたそれが「先」の見えない世相のようにも思えて不安が募る。

「攻めるよりも守るのがたいへん」ということを耳にしたことがある。もちろん「月刊かみのやま」がそれであるとはいわないが、あちこちにそのようなことがあることを私の頭を重くするのである。

ている。過年私は毎日新聞の山形版に毎週火曜日のコラムに書かせてもらったのも三百回だったからだ。あつという間にそれが七年間になつていったのだ。それが本誌は二十五年であるという。そのうち私がお世話になつたのはいつからか調べてみたりもしていないが岩井さんにはたいへんお世話になつた。感謝以上にあるがたかつている。とりわけ私はパソコンが使えないので手書きの原稿であるから多くの時間と手をかけさせて、ほんとにお世話になつた。

近年はどの出版社も新聞社なども手書きの原稿などは受け入れない。そんな時であるのに岩井さんはこのような汚い文字で書いた乱文を受け入れて下さつたのである。

いささか大袈裟になるが私が今もこのように命が伸びているのは「月刊かみのやま」があつたからだ、とさえ思っている。惚けた頭をしぼり、手で鉛筆を動かす。それが私にとっては最高の運動であるからだ。

「月刊かみのやま」の読者は意外に多いことが最近頃に思わせられている。とりわけそれが女性に多くみえる。「次の号を待つている」とその女たちはいう。するとそのことを岩井さんに伝えたくなることがたびたびあった。小さな雑誌であるが多くの人を楽しませていたことを思うからだ。

近年「本が売れない」という声をよく耳にする。以前は私のような者が書いた本でも初版は五千部つくってくれた。それが千部でも売れるかと心配している。そんな時代であるのにこの「月刊かみのやま」は三千部もつくっている、と編集長の岩井さんから聞いていた。誇るべき喜びであつていい。

過日この雑誌のスポンサーの一員であられる原田眼科医院に行つた。すると看護師さんたちにも「月刊かみのやま」を楽しく読んでいる」といわれた。十八年前に私が白内障で手術してもらったときの私を存じて下さつていてそのようにいわれた。それには歓喜を覚えた。女性の方にそのようにいわれたことが人並に男として嬉しかったのである。それはまさに「月刊かみのやま」が私に与えてくれた仕合せだと有がたく思つて嬉しかった。さらにまた三百号というのにはなにか縁がありそうに思つ

さらにまた、人と人との縁やつながりもできた。そのお一人が十年間も本誌の表紙の絵を描き続けられた竹内敏夫さんがいる。氏は小学生のときに私の叔母に教わつたとか。わが家であることを見知らずに洗濯物を干してある家を見て面白くみえて描いたところ、それが私の家であつたとか、そんな面白い思ひとつながりで親しくつきあうことになつたりもした。そんなことなどをこの「月刊かみのやま」が私に与え、生きる力にしてくれたのである。先日さいたま市の知人から自分史を書いた本が届いた。その本の一節に哲学者の三木清がいう「生活文化」ということばに惚れた、というのがある。私もそのことばにはすっかり惚れた。そしてこの「月刊かみのやま」もまた、私にとっては「生活文化」だったのである。

その思いを何かの形で続けたい、続けなければならぬと切に願っている。

## 《レギュラー》

昭和の本箱 まちライブラリー

### けやきの家

2026年度の営業開始は4月11日と  
なります。

□ オープニングイベント……  
**4月11日(土)、12日(日)**  
ユニットあるほなつきさん  
をお招きしてのワークショップです。  
ご期待ください。  
詳細は次号にて。

Wi-Fi 3台

上市市八日町(青山医院の北)  
詳細は……けやきの家まで  
**080-1394-5853**

### 第52回青藤茂吉 記念全国の集い

記念講演 2026/5/17  
「青藤茂吉と短歌の未来」  
登壇:山田富士郎氏

### 新収蔵資料展

2026/4/25~8/31

休館:水曜、4/30、5/7

※詳細お問合せください  
青藤茂吉記念館 072-7227

### 企画展「上山藩の侍が持つ ていた刀剣と武術伝書」

■会期 4月26日(土)~6月14日(日)  
【9:00~16:45 ※毎週木曜休館】

■内容 上山藩士所縁の刀剣と武術(刀・  
棒・柔術・馬術・銃砲など)の免状や教本を  
展示  
5月4日には居合の演武や体験会、チャンバラ  
大会も有(詳細は上山城HP)

■料金 上山城入館料

お問合せ

## 上山城

上市市元城内 023-673-3660

上山市観光課 〇三(六七)一〇一一  
 上山市観光協会の 〇三(六七)〇八三九  
 かみのやま温泉旅館の 〇三(六七)一四五六  
 上山市立図書館 〇三(六七)〇八五〇

上山城郷土資料館 〇三(六七)三三六〇  
 JRかみのやま温泉駅 〇五〇(〇)一六〇〇  
 蔵王坊平観光協議会 〇三(六七)二二一一  
 蔵王猿倉観光協議会 〇三(六七)二二一一

山交ハイヤー 〇三(六七)一六六一  
 観光タクシー 〇三(六七)二二三三  
 上山タクシー 〇三(六七)二二二二  
 上山レンタカー 〇三(六七)四一九〇

かみのやま温泉駅東口

蟹仙洞 ●

1F 美容室 シュシュ ●

2F 成蹊学習塾 ●

ゲオ ●

ツルハ ●

抗がん剤治療でお悩みのあなたへ

医療用ウィッグの購入支援及び助成金が受けられます。

美容室 **Chou Chou**

<http://chouchou6736030.blog.fc2.com>

上山市矢来4-8-1 ☎673-6030

小さなが、大きな

**ラベルパワー**  
SHINWA LABEL

進和ラベル印刷株式会社

〒999-3104 上山市蔵王の森10番地  
TEL (023) 672-7577

東京駅5分、家族経営の温かな料理店

**おじいちゃん**

上山中学校昭和40年度卒業  
 上山小学校昭和37年度卒業  
 さて、誰でしょう？  
 変な頭が特徴です。

中央区日本橋2-2-15 日本橋テイトビル2階  
 ☎03-3274-1797 上京の折、ぜひ来店ください。

**栗川稲荷神社**

上山市松山一―五二鎮座  
 事務所 ☎〇三(六七)三三三〇

御祭神 稲倉魂命  
 例旦祭 一月一日  
 元大祭 四月二十三日  
 月例祭 二十三日

由緒沿革  
 栗川稲荷神社は備中国庭瀬の城主松平信通公が城守護神として奉祀され、厚く信仰されてきたお社であります。

元禄十年九月出羽国上山に国替を命ぜられ、その後松平家の守護神として城内に社殿を造り固い信仰を捧げたのであります。

大政奉還の後は現在の松山高台に勧請鎮座を致し、年を重ねる毎に境内はもちろん県外よりの多くの参拝者を迎えるようになりました。

月刊『かみのやま』第300号 発行日 2026年4月1日  
 編集・制作/有限会社スタジオ・ワン 発行/上山を元気にする会  
 〒999-3145 上山市河崎2-4-23 ☎090-3363-5978 FAX.023-673-2023  
 発行人/阿部檀 編集人/岩井哲 題字/故 木村蔵六 編集協力/鎌上宏

月刊かみのやま  
 折々を飾った  
 表紙たち



創刊号 2001.5

100号記念号 2001.5



# こんにやく番所

懐石料理 お土産 カフェ  
ギフトも承っております



公式HP

楢下宿 丹野こんにやく



〒999-3224

山形県上山市皆沢諏訪前608-1

TEL 023-674-2351

FAX 023-674-2515

<http://www.tannokonyaku.co.jp>

なつかしい和（なごみ）の空間

かみのやま温泉葉山 彩花亭  
さいかてい

時代屋  
じだいや

☎ (023) 672-2451  
<http://saikatei-jidaiya.jp>

上山温泉・葉山

名月荘

MEIGETUSOU

〒999-3242 上山市葉山5-50  
TEL.023-672-0330(代表)  
フリーダイヤル0120-72-0330

月岡城址の宿

山形県かみのやま温泉



山形県 かみのやま温泉

仙溪園月岡ホテル

〒999-3141 山形県上山市新湯1-33  
TEL.023-672-1212(代)

かみのやま温泉 葉山



電話 023-672-0295

FAX 023-672-0425

ホームページ <http://www.hashimotoya.com>